
J@22部に入ろう！

あらく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J@22部に入ろう！

【Nコード】

N5354M

【作者名】

あらく

【あらすじ】

長編・学園ファンタジー！

音楽、楽器、演奏が好きな主人公：音羽誉が、廃部寸前のJAZZ部に入って廃部を逃れようと、頼りない部長と奮闘します！

ですが、物事はそう簡単には進まない！体の一部が異常に変色している能力者”色持ち”や、個性的なキャラクターたちをお楽しみください。

プロローグの双子

” 00 プロローグの双子 ”

冬5時半、朝比奈学院A棟にて。

まだ外は雪が冬季節の中、自慢の栗色の髪をなびかせて女子生徒はとある教室を目指していた。同好会や専門の教室を必要としない部活動の活動教室が集まる校舎で、階段を上り、長い廊下を進んだ後、彼女は足を止めた。

彼女の気配に気づいたのか、一人の男子生徒が駆け足でよってくる。

「奏ちゃん！今日はどうかしたの？」

その男子生徒と女子生徒の顔は、遠めで見ると瓜二つだが、片方は無表情、もう片方はへらへら笑っていた。言葉にたとえるなら”正反対”が妥当である。

「…双野君、JAZZ部の件はどうなっているのかしら？」

女子生徒は、自分と正反対の顔を見るのも不快と言いたげに、目の前の人物を睨んだ。そのせいで、男子生徒の表情がだんだん青くなってくる。

「…あつ…その、まだ部員は…」

「……………。…わかっているとは思うけど、期限はもうあと一年と残

されてないわよ？」

女子生徒のはっきりとした物言いに、男子生徒は思わず肩を震わせる。

「……っ……」

そして逃げるように視線をそらした。

その仕草が気に障ったのか、女子生徒は眉間にしわを寄せながら言った。

「あなたみたいなのに時間を割いてあげてるだけでも感謝してくれる？」

「わかってる……ごめん」

「それと、忘れてるみたいだから再確認してあげるけど、来年度部員がとれないようなら……廃部だからね」

「……わかってる」

女子生徒は姿を消し残された彼は自分以外誰もいない教室で、自らの身体を抱くようにして泣いた。

薄く目を開くと、ずっと楽器をさわってきた腕が二本。彼はこみ上げてくる気持ちを抑え、つぶやいた。

「……つくそう……こんな力さえなければっ……」

遅れてその声を掻き消すかのように、最終下校のチャイムがただ空しく響いた。

ブログの双子（後書き）

はじめまして。 あらくといえます。

小説を書くこう！様の方では、まだ右も左もわからない初心者ですが、みなさんに作品が気に入られたらなあ…と思いつながら、重いまぶたをこすりながらあとがきを書いております。

ブログの方でも同じ小説を連載中なので、はやく先が読みたいわ。という方が
おりましたら、ブログのほうにマウスカーソルを運んでくださると嬉しいです。

さて、もう夜も遅いので布団に引きこもります。
みなさんも風邪にはお気をつけて楽しい小説ライフを送ってくださいね！

ここまで読んでいただき、ありがとうございました！

始まりの音色は何色？（前書き）

本編。始まりの音色章です。主人公：音羽誉は、ただ音楽が好きで、普通の新生。唯一レギュラーなのは髪色。誉の髪は綺麗な海の色をしていた。そんな彼が朝比奈学園の正門をくぐるお話です。

始まりの音色は何色？

” 01 始まりの音色は何色？ ”

4月。

もうかれこれ10分くらい歩いているが、周りに見える景色は恐らくこの学校の最初の門をくぐってから全く変わっていない。

例年よりも若干温暖化を感じさせる今年の桜は、もう満開の時期は過ぎていて、隙間から鮮やかな緑色が見えた。

学業に専念できるようにと敷地内に寮も完備している、この馬鹿でかい学校。私立朝比奈学院は、普通のそれに比べて音楽が好きなのがたくさんいる学校だ。俺もそのうちの一人で、四六時中楽器に触れればいい。と思って入学した。だがしかし、その入学式を行うはずの聖堂が見当たらない。門から聖堂までは、桜並木の一本道のはずなので歩いていけばいつかは到着するだろうが、俺も含め周りの新生たちは足を進める度に顔が曇っていく。

普段なら10分、15分歩き続けたくらいではここまで疲れることはないだろう。だが、地面は洒落た石畳で、俺たち新生は腰くらいまでの高さのキャリアバックをガタガタと引っ張っているので、体力を消耗していた。

ふと、視線を上げると鬱陶しい桜並木はもう無く、澄み切った青空が広がっていた。

「新生のみなさん、荷物をこちらに置いた方から中へどうぞ」

声の方を向くとまず、立派な聖堂…というか、教会が飛び込んで

きた。俺の少ない知識では、聖堂と教会の区別ができないので、わかりやすい例えだと思ってほしい。

次にその入り口で、新入生と荷物を引き剥がしている女子生徒。その子の近くに荷物を置き、俺も中へ入った。

新入生であふれる校内聖堂。

作りは聖堂そっくりだが、コンサートもできるような作りになっているようで、無駄に広い。

一時間も掛からずに入学式を終え、プログラムは部活動説明会へと移った。配られた部活動説明会のパンフレットを準備する音が建物中に響く。

俺も用意しようとパンフレットを探していると、隣の女子生徒が話しかけてきた。

「私、はるかぜあきら春風晃。あなたは？」

「音羽おとは ほまれ誉……」

「音羽くんか。あのね、私たち同じクラスみたいだよ」

「……もうクラス発表が出るのか？」

「まだだよ。生徒会の先輩がね“海色の髪”の子のクラスが決まったって教えてくれたんだ」

「……………」

……” 海色の髪”。

俺は生まれつき髪が青い。

別にそれで過去にからかわれた記憶もないが、改めて言われると身構えてしまう。しかし、これは俺だけに限ったことではない。

生まれつき一般大衆よりも秀でた能力があれば、髪の毛に限らず、体の一部が異常に変色する事があるのだ。それは、目の色だったり、爪の色だったり実に様々だが、こういう人間の事を、通称”色持ち”と呼ぶ。

「…春風さんの髪もいい色だと思う。」

日本人にしては珍しい金髪だった。ところが、一瞬春風さんの顔が引きつる。

「ははっ、ありがとう。だけど、私のはただ染めてるだけだよ」

「そう…そうだったのか。すまない」

とっさに謝った。

ステージに視線を戻すと、さっきまで上がっていた垂れ幕が、下がっていた。その端のほうからマイクを持った女の子が、中央へ歩いていた。

全体のざわめきが消えると、その子はそつと話し出す。

「皆さん、お待たせしました。生徒会の^{そつの}双野^{かなで}奏です。」

始まりの音色は何色？（後書き）

こんにちわ。 あらくです！ここまで読んでくださりありがとうございます！

ブログではいぶん前に投稿した作品ですが、小説家になろうさまにも投稿させていただきました！

そして、今回から第一章（始まりの音色章）へと移っていきますが、あらくはすでに挫折そうです…オレンジジュース飲まないと言っていけないっ（笑）

まだ、小説を書くのに慣れていないので、ぶっつけ本番みたいな感じで書いてしまっています。誤字脱字指定大歓迎！

これからも、オレンジジュース飲んで頑張りますので、よろしくお願いします。

最後に、ブログで応援してくださる方々、本当にありがとうございます！

あらく

始まりの音色の噂（前書き）

前回 無事に聖堂へたどり着き入学式を迎えた筈。色持ちに興味があるらしい春風晃と出会った。

始まりの音色の噂

” 02 始まりの音色の噂 ”

見かけ大人しそうなその子は、その装いに反してよく通った声だった。

「高校生活をよりもりあげる部活動を、この時間でゆっくりみていてください。最初は吹奏楽部です」

紹介が終わると同時に垂れ幕が上がり、ステージ上でそわそわしていた吹奏楽部が演奏をはじめた。
落ち着く音色が聖堂いっぱいに響く。

「…この生徒会長って女子なんだな」

「そうだよ。…って3月の学校説明会で見なかった？」

「寝てた」

「はは、そっか」

3月：そういえば、合格者説明会があったのを思い出した。その日は制服だの靴だのなんだと色々買わされた記憶がある。

くだらない思い出に耽っていると、後ろがやけに五月蠅いことに気づいた。半ばガンを飛ばしてやろうと振り返る。

「…えってば！ やつとこっちむいた！ さっきの演奏さ、やつぱ

り高校はレベルが違うよな！」

そこには目がやたらキラキラした変な髪型の男がいた。しかも上半身を前に倒しているのか、やけに顔が近い。

「あなたは？」

俺の眉間にシワができたのを知ってか知らずか、春風さんが問うた。

「はじめまして！ オレ、とりしまれん西島蓮！！ きみが春風晃ちゃんで、お前が音羽誉くんだよな？」

「ああ」

「初めまして。…あ。それっ、あなたも色持ちなんだね」

春風さんが西島の髪を羨ましそうに見つめる。

西島の髪型は少し个性的だが、色的にはでまるで雪のような白だった。

「ああ、そうだぜ！ オレの家族は変な家系だからな！」

”色持ち”の人口は時代にもよるが、”色”を持っていない人、通称”色無し”とそんなに変わらない。

ただ、いくら”色”を持っているとしても、その強弱は個人差が激しく、半端な”色持ち”よりか努力して力を入れた”色無し”の方が優秀だったりする事もよくある。

「あ、あそこ！ あの女みたいな顔してんな！」

西島の指がさしてる方向を見ると、顔は遠くてすっかり見えないが茶髪の男子生徒が立っていた。その男子生徒はマイクに電源が入っていることを確認すると、少し緊張した様子で話し始めた。

「こ、こんにちは、ジャズ部の部長の双野です。去年結成して今年から部活になりました。是非見学にいらしてください」

ジャズ部長の双野は照れ臭そうにしながら戻っていくと、今まで静かにしていた新入生たちがざわめきだした。

新入生「ジャズってなんかいいよね」

新入生「おいバカ！ あの噂をしらねえのかよ」

新入生「そっいえば生徒会長と同じ名字だねー」

頭の片隅で噂好きな奴らだと思っていると、こっちにも同じような奴らがいた。

「噂ってなんだろうな!」

「気になるね」

ため息が漏れる。

「以上で部活動説明会を終わりです。この後、新入生は各自の寮に向かうので指定された場所に移動してください。また、男女それぞれの寮長は打ち合わせ通りに動いてください。最後に役員はステージに集合してください。」

「どうやら、騒いでいる間に紹介は終わったらしく、部活動説明会はこれでお開きとなった。」

「じゃあ、またあとでね」

「おう！ 行こうぜ誉！」

俺は酉島に引っ張られるように集合場所へ向かった。

寮に入ったら、こいつとだけは相部屋になりませんように。と心の隅で神に祈りながら。

始まりの音色の部屋割り（前書き）

前回 部活動説明会は、雪のような白さの髪を持つ西島蓮と出会った。そしてJAZZ部長が出てくると、その噂でもちきりに。だが、内容は今だ誉たちは知らない。その後、新入生たちは各自の寮へ行くこととなった。

始まりの音色の部屋割り

” 03 始まりの音色の部屋割り ”

聖堂の入り口側に女子が集まり、奥側に男子が集まった。その男子の集団の中心に二人、背の高い生徒がいた。

一人は笑顔が張り付いたような好青年。もう一人はこの季節だといふのにマフラーをした青年だ。

新入生の男子が全員集まると、笑顔の青年が口を開いた。

「僕が西男子寮の寮長。3のC、^{へいあんざ}平安座さんだよ。こっちの無愛想なのは東男子寮の寮長兼相棒の冬木^{ふゆき}くん」

紹介されたマフラーの冬木さんは無言でぺこりと頭を下げた。それを確認すると平安座さんは内ポケットから紙を取り出しながら言った。

「これからランダムに君たちを東西に振り分けるよ。東と言われたら冬木の方に。西と言われたら僕の方に来てね」

聖堂を出て廊下を通り抜け、階段一回を上がって一回下がった。その間、平安座さんの口から言葉が途切れることはなかった。校長と生徒会長の話や、さっきの冬木さんの話。次から次へと言葉が紡がれるので、聞いてることこっちが疲れた。

聖堂を出てから約5分。渡り廊下の突き当たりで急に彼が止まった。

目の前には決して丈夫そうには見えない木の扉が一枚。

「ここが男子寮の入り口だよ。今日から君たちはこの中で寝起きする事になるね」

俺は少し不安になりながらも、彼の後に続いて、中へ入る。

まず目に付くのは鍵付きの下駄箱。それから暖かさを感じるカーペットや照明、ローテーブルにソファアのセット。二階があるのか、奥に階段も見えた。

「おお！ なかなかの広さだな！」

「確かに」

「気に入ってくれたみたいで良かったよ。ここは、ロビー。向こうには朝夕食のための食堂と共同風呂。トイレはこの階に4室、2から4階からは各階に2室あるよ」

外から見たときは気づかなかったが、この建物はそれなりの広さのようで、日本にいるはずなのに、ここにいると感覚が狂っていくような気がした。

今年度入学した一年生は男女合わせて238人。単純に計算すると男子は119人になる。

そしてこの寮にいるのが、そのまた半分の約60人。つまり、その3学年分がこの西寮で寝起きする事になるわけだ。俺は諦めにも似たため息を漏らした。

「うん、みんないるね。これから裏口からみんなの荷物を部屋に運んでもらうんだけど、その前に部屋割りを発表しまーす」

言ってから彼は藁半紙を配りはじめた。しかし、配られたものにはなにも書かれていない。透かしてみたが何かが浮き出てくる様子もない。

「すんませーん！ オレの紙、真っ白っす！」

隣にいた西島がプリントをひらひらとさせると、平安座さんは笑顔のまま少し嬉しそうに言った。

「うん！　じゅあ、書き込まなくちゃね」

彼は全員の部屋割りが書かれている紙と、俺たちに配った藁半紙と同じものをテーブルに出してペンを持った。

そして、こう言った。

「自分たちの紙を見ててごらん」

始まりの音色の昼食（前書き）

前回 平安座についていき、寮へ来た誉たち。部屋割りのプリントを渡されるが、その紙は真っ白だった。

始まりの音色の昼食

” 0 4 始まりの音色の昼食 ”

彼のペンが藁半紙に触れたとき、そこから微かな緑色の光が現れた。ペンを滑らせれば、光はペンを追いかけるように紙の上を駆けてゆく。

「おお！ すげえ！ 見ろよ、誉！ 紙に文字が浮き出てくるぜ！」

視線を手元に戻すと、さっきまで何も書かれていなかったはずの紙に次々と部屋番号と名前が浮き上がってきた。

「本当だ… こんな能力があるのか」

少し待つと俺の名前も出てきた。

410号室。

寮は二人で一室の相部屋なので、隣にはまだ空白が残っている。

「おいおい。こんな大量にしかも一気にコピーペーストできる能力なんて、俺は知らないぞ」

新入生の一人が呟いた。

他の生徒も自分の紙と平安座さんの手元を交互に凝視する。そしてとうとう、俺と相部屋になるやつの名前も出てきた。

「お！ 一緒の部屋だぜ！ 良かったな、誉」

「おお。まじか…」

別に西島のことを嫌なわけではないが、俺は五月蠅いのが好きな方ではない。しかし、隣で喜んでいるこいつを見ると、肩の力も自然と抜けてしまった。

そして、最後の番号まで書き終わると、平安座さんが大げさに深呼吸をした。

「はい、お終い。みんな部屋どうだった？」

返事を気にする素振りもみせず、ペンをゆっくりと置いた彼は、手を耳の横に移動させた。そして自分の手のひらを顔と向かい合わせにして、意味ありげに微笑んだ。

「爪が…」

「正解！ この”若葉色の爪”の能力だよ。さっきコピーペーストって言ってた人がいたけど凄いいね。これは、書いてあるものをコピーしてるんじゃないくて、書きたいものを書きたいところに、何十何百、遠近問わずに同時に書ける能力。コピーと似てるけど、写しじゃなくて全部手書きだよ」

同時に数ヶ所に記述する能力。便宜上、記述使いとでも言おうか。それにしても、ここまで精度の高いのはそうそういないだろう。

「それじゃあ、裏口から荷物を運ぼうか」

荷物を部屋に運び、再び聖堂へきた。午後は、上級生との対面式があるらしい。

「これから対面式を始めたいと思います。静かにしてください。開式の挨拶を校長先生お願いします」

朝に見た生徒会長の双野さんが出てくると、順調に式は進んだ。暇な俺は、周りの新入生を見渡した。周りには髪色が異常なヤツがちらほらといた。次に少しかだけ背筋を伸ばして、上級生を見渡すと、あつちにもちらほらいる。

その中で、一際目立つ桃色の髪をした生徒がいた。よく見ると、時々彼女の側から何かが行き来しているようだ。それに合わせて桃色の髪が揺れる。

「なんだ？ あの人」

もう少し、もう少しと姿勢を変えていると、隣にいた西島が肩を叩いてきた。

「おい、なんかあったのか？」

「あ。ああ、あの桃色の髪の子…」

「もしかして、佐伯さえぎあとりちゃんのことか？ あの子のあだ名は色々あってだな… 綺麗なのだと、桃色のキューピッドっていう異名を持っているんだぜ！ 恋に悩んでる女の子があとりちゃんのことるに相談しに来るらしい」

「そうなのか。ていうか、なんでお前そんなこと知ってるんだよ」

「女の子のことは、この蓮くんレーザーでだいたいわかるんですー！」

そう言いながら、西島は自分のピョンとたった髪の毛を指しながら答えた。そういえば、午前の入学式の時も、前の席だったとは言え春風さんのこともわかってたみたいだしな。

ステージ上では偉そうな保護者の代表が締め挨拶をしていた。

「これが終わったら、とうとう部活動見学だな！ 誉はどこか行きたい部活あるか？」

「そうだな… 吹奏楽か軽音か… 楽器が吹ければどこでもいい」

「おう！ それならJAZZ部なんてどうだ？」

思い出せば、そんな部活もあった気がする。たしか部長は双野なんとかっていう生徒会長と同じ名字の奴だ。

「いいかもな。行ってみよう」

丁度式も終わり、上級生は聖堂から退場し新入生だけが残された。そして、今後の流れを学年主任が報告して、昼食に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5354m/>

J@22部に入ろう！

2010年10月12日08時54分発行